



## [経 過]

東光圏域第2層協議体「東光をよくするための語ろう会」で、地域行事が減少したことなどによる地域住民や福祉事業所の関係性の希薄化についての課題が挙げられたことから、地域住民が参加することができる行事の開催の検討をすることになった。

## [メンバー]

### ○東光ほほえみ祭実行委員会

- ・ 有限会社ほほえみゆたか おふろとくつろぎ デイサービス この家で、グループホームすてきだね
- ・ 東光地域包括支援センター
- ・ 東光5の北町内会
- ・ 東光圏域地域住民（ボランティア）
- ・ 地域まるごと支援員
- ・ 東光圏域地縁組織
- ・ 東光圏域福祉事業所

## [目 的]

- ・ 地域住民の参加の機会の創出
- ・ 福祉事業所と地域住民の交流の機会の創出
- ・ 地域行事のニーズの確認
- ・ 行事開催に係るノウハウの取得

## [その他]

日時：令和5年9月23日（土） 13時00分～15時30分

会場：グループホームすてきだねの駐車場、デイサービス この家で

# 実績

## (事業・活動の実績)

### ○良かった点

- ・近隣の子どもたち、高齢者、事業所の利用者の参加がみられた。
- ・ボランティアや個別支援対象者の社会参加の場になった。
- ・事業所や町内会等と連携し、事務局の負担感の分散、ネットワークの構築をすることができた。
- ・地縁組織や福祉事業所に、行事の新たな実施方法を示すことができた。  
⇒東光5の北町内会の町内会長から「次年度も祭りを開催する際には、町内会も交えた共同事業にさせてほしい」との感想をもらった。

### ○難しかった点・今後の課題

- ・負担感や費用面を抑えつつ、地域住民に参加してもらえるような工夫
- ・地域主体の継続した行事にするための、まるごと支援員のフォローのあり方について
- ・今回の活動を地域に知ってもらうには、どのような方法が考えられるか

# 総括

地域の行事は、地域住民が参加・交流・活躍する機会になるなど、地域で行う行事のニーズを再確認した。必要とされる行事を実施・継続していくためにも、運営側の負担感を減らすなど、現代型の「行事のやり方」を東光圈域第2層協議体「東光をよくするための語ろう会」で協議・報告していく。

# 中央圏域協議体（大成地区）／B地域

（大成地区ざっくばらんの集い）



## 【概要・経過】

「大成地区ざっくばらんの集い」は、大成地区の地区市民委員会福祉部、地区社会福祉協議会、地区民生委員児童委員協議会、地域でボランティア活動をしている方、地域の福祉施設職員や相談支援を担当する専門職等が参加をして、大成地区の課題等を気軽に話し合える場として発足した会（令和2年度から、「ざっくばらんの集い」参加者を構成員として生活支援体制整備事業の「協議体」として位置付け、協議を進めてきた。）。

大成地区では新型コロナウイルスや地域状況の変化によって、「サロン等の集いの場」が開催できない状況となり、地域内での住民同士の交流が難しく「高齢者の孤立」や「つながりの希薄化」が心配されていた。このことから、協議体で話し合いを進め「集わなくてもできるつながりづくり」の検討を行ってきた。

## 【協議体メンバー構成】

大成地区市民委員会福祉部（大成地区社会福祉協議会）、大成地区民生委員児童委員協議会、地域のボランティア、社会福祉法人職員、地域包括支援センター職員、地域まるごと支援員

## 【ねらい】

協議体では「集いの場に通えなくなった方たちとのつながりづくり」をテーマに地域内の孤立防止やつながりについて「地域住民」「関係者」「関係機関」と協議、検討を進め課題解決に向けた取組みへの展開を目的とした。

# 実績

## (事業・活動の実績)

### ○良かった点

・検討を始めた当初は、「サロン会場の閉鎖や取壊し」「新型コロナ禍の影響」により区内に4か所あった集いの場が全て消滅してしまっていたが、「集いの場」だけにこだわるのではなく「地域住民同士のつながりを維持すること」を目的に手紙や通信を活用した訪問型のつながりづくり等を地域内の住民や関係者が主体的に企画し実施することができた。

・新型コロナウイルス感染症分類が5類に引き下げられてからは、集いの場再開に向けた話し合いを進めた。その結果区内の福祉事業所（高齢者施設：デイサービス等）の協力を得て、施設をサロン会場として活用できるようになった。

⇒今までと異なる場所で集いの場を再開することができたことで新規の参加者も増加傾向となり、つながりづくりの強化にもつながっている。

・集いの場再開に際して、地域の福祉事業所等の協力を得られたことに加え、旭川市自立サポートセンターと連携をしてセンターの相談者の方の力を借り「ふれあいサロン」のチラシを作成していただいたことで、地域（担い手）の負担が軽減され地域活動の推進がスムーズとなった。

### ○難しかった点

・様々な事情により一度休止となった地域活動が、担い手の高齢化や不足により再開することが難しい状況となった。

# 総括

・地域の社会資源（社会福祉法人や福祉事業所、自立サポートセンター）との連携（協力を得る）をすることで、課題となっていた住民同士の「つながり」の回復やその機能の維持をすることができるようになったことに加え、担い手の高齢化や不足等の課題と上手く向き合うきっかけにすることができた。

今後は自立サポートセンターとの連携実績から、近隣にある相談支援機関や障害の事業所等と連携の可能性などについて検討を進め、地域福祉活動や地域課題の解決に向けた取組を地域全体で考えることができるつながりづくりを目指して継続的に協議を進めていきたい。

# ボランティアの担い手を養成する取り組み／C地域

## 北のほし☆ボランティア養成講座 [ステップアップ編]



↑特別養護老人ホーム「エテルナ」にて



### [経 過]

平成30年度より、北星公民館および北星・旭星地域包括支援センターと共催でボランティアを養成する取り組みを継続。コロナ禍前は施設でのボランティア体験も実施していたが、コロナ禍で座学中心の講座が続いていた。昨年度は「はじめて編」として初心者向けの講座を実施し、今年度は実践に役立つ知識習得と、つながり作りに焦点を当てた内容とした。

### [目 的]

- ・地域の施設とボランティアとのつながりづくり
- ・ボランティア同士の横のつながりづくり

### [プログラム内容]

- 第1回 「高齢者を理解する① ～認知症について学ぼう～」
- 第2回 「高齢者を理解する② ～施設に行ってみよう～」
- 第3回 「障がいのある方を理解する ～お話とボッチャ体験～」
- 第4回 「自分たちができることを考える ～みんなと語ろう～」

# 実績

## (事業・活動の実績)

### ○良かった点

- ・ボランティアの活動内容や状況について、参加者同士で共有する機会となった。
- ・圏域内の介護施設を参加者が身近に感じるきっかけとなった。
- ・施設として今後ボランティアと協働できそうな事業についてイメージをもつ機会ができた。
- ・レクやグループワークを通して、参加者の人柄や活動ニーズを知る機会となった。

### ○見えた課題

- ・講座参加にてボランティア登録をしても、依頼者と担い手双方のニーズがうまく合致しないと活動につながらず、担い手側のモチベーション低下や活動頻度の偏りにつながっている。
- ・圏域の介護施設等は、コロナが5類になった後も施設の開放までには至らない所が多いため、施設でのボランティア活動については、もう少し時間が必要。

# 総括

- ・担い手を養成するだけでなく、多様な関係機関と連携を図り、活動の場について検討していく必要がある。
- ・養成講座が参加者にとって魅力的なものとなるよう、内容や運営方法の工夫が必要。

## パソコンサークル/D地域



### [目的]

地域まるごと支援員、自立サポートセンターの相談者で、ひきこもりがちで、自宅以外の居場所なく、他者と関わる機会が乏しい方に社会参加、就労活動準備の場として自立サポートセンターと協働し開催。定期的な外出の機会、他者と関わるきっかけ作りとして活用。

### [メンバー]

自立サポートセンター 相談者 2名  
地域まるごと支援員 相談者 2名 (1名講師)  
自立サポートセンター職員 地域まるごと支援員

### [開催頻度]

月に1～2回程度開催。参加者の意向確認し実施。

### [内容]

Excel・Wordなどテキストを参照しながら各自で自己学習。わからない点について講師役または職員が対応。

# 実績

## (事業・活動の実績)

### ○良かった点

- ・未就労期間が長く、就職活動に消極的になっている参加者にとって、興味のあるパソコンの操作ができることで、自宅以外の外出先、定期的に通う場所が確保できる。
- ・定期的に他者と顔を合わせるため、自然に苦手とする人間関係、コミュニケーションの訓練ができる。
- ・就労支援活動の準備として、少しでも自信をが持て、就労活動、社会参加の一步となっている。
- ・本人のペースに合わせ、無理なく、ストレスなく、ゆったりとした中で、面談では得られない、話、表情等が捉えられる。

### ○難しかった点

- ・定期的な開催ではあるが、就労に結び付けられるようなスキルアップ、報酬を得られる作業にはならない。
- ・開催頻度を増やし活動内容も見直したいが、交通費が自己負担のため、未就労者にとっては出費を増やしてしまうので参加を促せない。
- ・自立サポートセンターと協働開催。相談者にとってはどちらも支援者に変わりなく、目標も自立に向けた支援ではあるが、事業が違ふことでできること、できないこと、参加、不参加など隔たりが出来てしまうため、協働開催として新たな一步が踏み出せない。

# 総括

- ・ひきこもり、未就労者、相談者の多くが、人と関わるのが苦手で、自己肯定感が低く、自分のしたいこともイメージができない。ものすごい勇気を振り絞り、相談に繋がったのだと思います。その一步は、計り知れないほどの強さだと思い相談者の一步をもっと充実したものにしたい。
- ・就労支援活動の準備として、企業の切り出し作業の請負や地縁組織の事務作業など少しでも報酬が得られ、参加するときの交通費程度の捻出ができ、就労体験に繋がるなど、仕事未満ボランティア活動以上の経験ができたのなら、成功体験の積み上げが自信となり就労、社会参加の一步になるのではないかと思う。同じような支援者と協働しながら新たな仕組み、ネットワーク構築を目指したい。